IF.あり得たかもしれないシカマルと多由也

清水縁

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもシカマルが多由也を木の葉に連れて帰り居候という形で生活していたら…？というマイナー？な小説です

目次

木の葉隠れの奈良家 ―― 1
互いの変化、周りの変化 ―― 8
天才と秀才 ―― 13
縁側にて ―― 19
時雨 ―― 28
梅雨の木漏れ日 ―― 36
甘栗 ―― 42
影鬼 ―― 47
天気雨 ―― 54
空想、想像、夢幻 ―― 59
間違い探し、答え合わせ ―― 72
迷い、憂鬱、夢現 ―― 79
焙じ茶 ―― 84
月明かりはまだ見えず ―― 89
姦しいのに３人４人も変わらない 94

木の葉隠れの奈良家

ｓｉｄｅシカマル

俺が中忍になって初めて行った任務はうちはサスケの奪還任務だった
メンバーはナルト、キバ、ネジ、チョウジ、そして俺というバランスは良いが
実力的にはやや不安感が残る、そんなメンバーだった
任務は失敗、完全に俺の作戦ミスと圧倒的に情報が足りなかった…
いやこれは言い訳だな…
実際俺が相手をした音忍の女忍者はある程度は追い詰めたつもりだったが
元来面倒くさがりな俺は修行不足のせいでスタミナ切れを起こして
影首縛りどころか影真似の術も使えなくなっちまう始末だった
あと数秒でも応援に来た砂隠れのテマリの到着が遅ければ…
まあ死んでただろうな…
そう思うと未だに冷や汗が出る
他の仲間は大怪我、俺は幻術を解く為に指を折っただけ…
正直、忍びを辞めようと思ったくらいだ

責任とかそう言うのじゃなくて純粋に怖かったんだ
俺のせいで仲間が死ぬってのが凄く怖かった
親父やテマリに激励くらって今はひたすら修行の日々だ
正直めんどくせーってよりもキツイ…
まあ今までのツケってやつだな
アスマや親父にいろいろ指導してもらってる
今回の任務で唯一の収穫…と言うべきかはやや分からねぇが
俺が相手した音忍の捕縛、並びに大蛇丸や
呪印ってやつの情報を得られたことくらいか…
聞き出した情報では名前は多由也というらしい
幻術使いだが大蛇丸から呪印を与えられている事もあり力が強い
恐らくは近接戦闘も得意ってところか？
今は俺の家、奈良家の養子として居候している
呪印は綱手様が一時的に封印、定期的に封印術を受けに行っている
その際に何故か俺が連れて行くって決定されている…
前までの俺なら有り得ない発想だが
コイツを綱手様の所に連れて行く暇があれば

修行をしてぇと思ってしまう…
だが、木の葉に連れてきたのは俺だし
責任は取らねえと筋が通らねぇしコイツが呪印の封印を拒否すれば
影真似の術で綱手様の所まで連れて行けばいいだけの話
チャクラコントロールの修行だと思えば丁度いい…筈だ
コイツを木の葉に連れてきた理由は大きく3つある
1つ、呪印について聞き出すこと
2つ、音隠れの忍びの情報を聞き出すこと
3つ、…まあコレはおいおい話すとしよう
最近はコイツもまぁ大人しい、まさかお袋と仲良くなるとは思わなかったぜ…
まぁ…何となく性格も似てるしな気があうんだろ
最初は凄えコイツ暴れるしお袋と喧嘩はするし親父と俺が影真似で止めないとヤバかったな…
家がぶっ壊れるかと思ったぜ…
親父とは意外と気があうらしくそれなりに雑談をしてる
俺以外の家族とは仲良く出来てるって感じだな
女を殴る趣味はねぇけどコイツは手練れだ、偶にだが頼み込んで組手をしたりもして

る

コイツ幻術使いの癖にやはり体術も凄え出来る正直凄え強い

改めて修行を真面目にやり始めてなければアッサリ負けてたな…

最近はチャクラ量もだいぶ増えてきたってのもあるが親父から術の稽古も受けてるからな

それなりに強くはなってる…筈なんだがイマイチ分からねぇな…

ナルトは自来也さまと修行の旅、他のみんなもそれぞれ気合い入れて修行してるから負けてられねぇって思う

取り敢えずは俺の今後の課題はチャクラ量のアップ

体術の鍛錬、あとはチャクラの性質の把握だな

ーーー

多由也ｓｉｄｅ

最悪だ、最悪だ、最悪だ!!

任務失敗はこの際どうでも良い、それよりもまずは木の葉隠れに情報を話しちまったとかそれもヤバイが取り敢えずは良い!!

…いや大蛇丸様に知られたらまず殺されるけど取り敢えずは良い!!

ウチと戦った奈良シカマル…コイツのうちに今は何故か居候してると言うのもまだ良いとしよう！
呪印を封印されてる際に影真似とか言う術で無理矢理連れて行かれるのも百歩譲ってまだ良い!!
だがなんなんだコイツら居心地が悪いって来たばかりの時は思ってたのに慣れちまったら
なんか居心地が良くなっちまった…
イノとか言う奴も知らねぇが割と良い奴だし…この里の奴らは馬鹿なのか？と思ってたら
オヤジさんは普段は抜けてる感じがするクセに監視役も多分兼ねてる…
と言うか一度、逃げようとしたら先回りされて世間話に持ち込まれたら居候先にいつのまにか帰ってたし…
オヤジさんが正直一番タチが悪いんじゃねえかって思うぜ…
ウチとやりあったシカマルってのも偶にだが組手の稽古って事で相手をしてやってるが
初めて戦った時よりだいぶ強くやってやがる
しかもかなりのスピードで成長してやがるしな…

平和ボケしてる里だと思ってたらウチがこの体たらく…
情けねぇ…叔母さんもだいぶ強え精神的にもな
正直叱られた時は大蛇丸様と同じ空間にいた時よりもキツかった…
だが！一番最悪だと思ってるのはウチをここまで連れてきたコイツ！
シカマルの野郎がなんか意外と優しい事だ!!
戦ってた時は汚ねえやり方のクソヤローだと思ってたが
割と紳士的な上に気遣いが出来るやつだって事だ!!
正直ギャップってやつか？それで割と参ってる…
火影の綱手ってババアは気づいてるみたいで呪印の封印のたびに近況を聞いてきやがるし…
まぁ…嫌じゃねえんだがそこが問題なんだ
ウチは木の葉崩しを行なった一人だしよく思われてない
そんなウチを匿うような形のコイツの家が…なんていうか不憫に感じる
前まではこんな事全く思わなかった筈なのに…解らねぇ…
そう言えばシカマルのヤローが中忍から上忍に昇格するとか綱手のババアから聞いたが…そんなに強くなってるのか？
最近は組手もしてないからよくわからねぇし…

たまにはこっちから誘ってみるか？
将棋でも指す時にでも誘ってみるのも悪くはないな
つーかあの野郎が上忍ってのがイメージわかねぇな…
なんかムカつくし今度、叔母さんに頼んでゆで卵を使った料理でも出してやるか…
スコッチエッグとか言うのが叔母さん曰く美味いらしいしな
流石に一緒にいる期間が長けりゃ苦手な食い物くらい解るってのを知りやがれ！
それにしても…イノのやつ何でニヤニヤしながらウチのことを見てんのか分からねえんだよな…
正直、不気味っていうより気持ち悪いから辞めるように言うべきか…？
あ、またウチが他人の心配してる…？
……この里の甘さが移ったのか？

続く

互いの変化、周りの変化

ｓｉｄｅイノ

シカマル達のサスケ君奪還任務は失敗したと聞いたとき悲しさよりも先に

シカマル達の怪我の心配をした私はサスケ君の事を言うほど好きじゃなかったという事を知った

サクラは泣いていた、それはサスケ君とナルトに罪…と言うか

呪いの様な使命感を与えてしまったからなのだろう

サクラは医療忍者になると言って綱手様の弟子になった

…私は決められなかった

誰かを助ける為に医療忍術を学ぶか、体術を鍛え直すか先に進む術を見失ってしまった

ある日、サクラに聞いた「アンタさ、なんで医療忍術を習おうとしたの？」

サクラは答えた「ナルトとサスケ君には力がある、人を守るだけの力」

「私には…それはない、だからせめて救う為の力が欲しいだけよ」と

あぁ、この子は相変わらずだ

真っ直ぐで愚かなほど実直で…いつのまにか私より強くなっている
しばらくして私も医療忍術を習う事にした
少し違うのはサクラと違い戦う為の訓練も交えた修行だと言う事
強くなるためではなく、自分の限界を知りたくなったから
限界が見えたら次に出来ることを探して力をつけたい
サスケ君やネジさん、ナルトみたいに特別でないからこそ
器用貧乏と言われても良いから進むって決めた！
…まあ面と向かって器用貧乏だと言われると腹が立つけどそれは無視しよう
努力をするのをバカにしていた自分とは見切りをつけた
だから、コツコツと力を蓄えていこうと思う
まずは中忍になってやる!!

ｓｉｄｅアスマ
シカマルが初任務に失敗してから奴は大きく変わった
俺としてはいずれはこうなると踏んでいたが…それは予想より遥かに早く来た
シカマルは切れ者だ、これまで以上に経験を積み作戦を立て任務を遂行するだけでも
大きく変化すると踏んでいた程に

だが、俺の期待を良い意味でアイツは裏切ったな
戦闘技術、術の応用、戦術、スタミナの強化…あげればきりがない程にアイツは鍛え上げていた
理想的な、それも上忍にもそうはいないだろう忍になりつつある
それもたった一年でな…
何のためか？と考えれば…恐らくだがアイツはアイツの【玉】を見つけたんだろうな…
さて、今日も軽く捻ってやりますかね!!

ｓｉｄｅシカク
あの馬鹿息子がようやくやる気を出した、理由？
もちろん聞いたさ
なんでも強くなりたい、今度は失敗などしないとかいって
俺に作戦立案法、戦術理論を聞いてきた…のはまぁ予想の範疇だったんだが…
組み手や術の完成度のチェック、新たな術を学ぼうとする姿勢というのは想定していなかった
アイツが強くなりたいって言ってきた

語らなかった本来の理由を知っている身としては吝かではないんだが
…だがそれは正しくあり、正しくない動機だと俺は思う
まあ、少なくとも親としては悪くない動機だと思うが
青臭いガキが背負うには早すぎる覚悟と信念だ
それを…あの馬鹿息子は解っているからタチが悪い
やれやれ…もう少し厳しくして根を上げるならそこまで
まだまだと食らいつくなら…本腰を入れないとな

ｓｉｄｅヨシノ
ウチの馬鹿息子が最近おかしい…具体的に言うと多由也ちゃんを木の葉に連れてきた時からかな？
おかしいと言ってもアイツにしてはおかしいって話だ
ウチの息子は面倒臭がり屋で、楽しい事よりも気楽なことを優先する
いつも雲を見ながら昼寝をしている、そんな息子だった
もちろん良いところもたくさんあるんだけどね？
最近は旦那や猿飛先生、そのほかの方々に修行をつけてもらっている…
そんなに初任務が失敗に終わったのが悔しかったのかしら…

…まあ、あの子も男の子だってことなのかもね
特に本来であれば必要のない捕虜を連れて帰るような男になったんだ
あの子なりに考えもあるんだろうと見守ることにした
それにしても多由也ちゃんは物覚えが良い…家事も最初は嫌がっていたが最近は向上心の塊かと思うほどには
ただまぁ昔の私みたいに素直じゃないねーこの子は
この子が後悔しないように頑張って欲しいものだと思う
ただ…スコッチエッグは美味しいよ?だけどウチの馬鹿息子はゆで卵苦手だけど平気なの?
素直にならないと後悔するわよ??
まぁ、気づいてないんだろうけどね…昔の私に本当にそっくりだよこの子は

続く

天才と秀才

ｓｉｄｅ多由也

シカマルとネジとか言うやつが組手をする事になった
なんでもアイツらの先生だという2人が教え子自慢をしてたら
どっちが優秀か決着をつけることを勝手に決めたそうだ…
うん、なんつーかアイツらも苦労してるんだな…って何と無く思った
つーかネジってやつは天才らしく勝つのは無理だと思う
確かにシカマルのヤローは計算高く戦術面で言えば多分だが
木の葉の忍じゃそうそういねえ程だとは思う
だけど無理だろうと思う理由もある
それはシカマルの甘さ
忍の強さは体術や忍法で決まるってのは当たり前
だが、本来なら勝てる時でも負ける野郎は負ける
忍ってのは心が強くなければならない

何度も稽古に付き合った身としては
確かに最初に戦った時よりは
……まぁ強くなっているとは思う
しかし君麻呂には届かないし、ネジってやつにも恐らくは届かない
結論から言うならシカマルに勝ち目はない…ってのが印象だ
だがアイツはウチと戦って生き延びている
少なくとも呪印を使ったウチと戦って生き延びるなんて
少し前まで下忍だった中忍ならまず無理だとウチは思う
上忍でさえ手が出ないやつもいるんだからな
呪印で力を底上げしたウチと戦って生存したこれだけでも快挙
策を使いウチを追い込んだ事は正直あり得ないと思った
大蛇丸様がもし目をつけていたら…どうなったか解らない程に
まぁ、それはさておきウチと修行をしてそれなら以上に強くなってるはずなんだ
簡単に負ける事は許さねぇぞシカマル…
ーーー
ｓｉｄｅ先生達
シカマルとネジが組手をすることになった

いや正しくは師匠として戦わせたい、どちらが上か競わせたい高めさせたいと言う気持ちと
まあ…担当上忍としての意地ってやつか
俺の教え子の方が強いって本気で思っている
少なくとも俺達は勝敗ではなく、あいつらの強さを信じている
どっちが勝っても遺恨はなし
互いに高めよ
負けたのならば理由を知り、勝ったのなら慢心せずに精進すべし
それこそ忍びのあり方だと
さて、どうなるかな…？
ーーー
ｓｉｄｅネジ
ガイ先生からシカマルと勝負しろと言われとりあえず来たが…
あいも変わらずコイツはこういう類の事にはやる気が見えないな
何故あれだけ頭がキレるのに自ら精進しないのか…
アスマ先生に言われて渋々という感じか？
前の任務失敗を気に病んで忍を辞めるところの手前まで考えたと聞いたのに呆れる

な…
少しだけ揉んでやる、そこから這い上がって次に活かせよ
そんな風に思っていた自分が驕っていた、慢心していた
それを知るのはほんの数刻後だった
ーーー
ｓｉｄｅシカマル
風を切る音がする、目の前にはネジが組手をしながら焦っているのがよく解る
コイツは天才だ、たった数秒で『本来の目的』に意識を向けられるほど
だけどな
俺だって努力をしてる
ひたすらに強くなろうと足掻いている
お前のことだ、何故コイツはやる気がないんだとか思ってたんだろ？
演技に決まってるだろ？俺が組手を承諾してる時点でもうおかしいんだと思え
汚い？勝つために必要な策だったんだよ
俺は失敗したとはいえお前の指揮をとってたんだ情報は十分だ
あまり舐めるなよ天才
俺は俺のやり方を探すためにお前との組手も利用するし

何度でも失敗してやる、だけどな
何もせずに諦めることだけは辞めたんだ
せめて死ぬほど努力して報われなくても挑み続けて死んだらその時に諦めてやるって決めたんだ
覚悟をつくらねぇとお前らみたいなのには勝てねぇんだよ
だから
俺を容赦なく倒すつもりがなければ負けてなんてやらねえぞ!!
ーーー
ｓｉｄｅ多由也
流れるように組手は進んだ
状況はネジが現在はやや劣勢ってところか
シカマルが起爆札がついたクナイと煙玉がついたクナイを同時に投げ先制攻撃
ネジってのは弾いたがその後の対処に遅れて顔面に一発喰らった
その後は独特な動きの体術や忍術で応戦してたが
シカマルは様々な手で先手を取って動きを制限させていた
つーか次で終わりだろうな
予想通りというか

ネジが闇雲に突っ込んで来た瞬間に影真似の術で縛り詰み
敵は体術には優れていた…それ故に決め手として選んだのだろうが
…あいつの術を忘れるとか、焦りすぎだな
他の忍術を使おうとすれば隙ができる
だから前に出て体術で仕留める算段だったんだろうが
その戦い方のみでいうなら今回は相性が悪すぎた
忍法　影真似の術は影でとらえた敵に自らの動きを強制させる術だ
つまり近づいても決定打を確実に与えなければ影に捕まりそれで終わり
そして事前に苦無を刺してある場所まで誘導した
シカマルの勝ちと判定された
まぁ、死人出しちゃ意味ねぇしな…
アイツが勝ったのは正直意外だ
戦い方は上手くなってる、ウチと戦った時よりも遥かに
なのに…嬉しそうじゃないのはなんでだ？
続く

縁側にて

パチリ、パチリと乾いた音が聞こえる
私はシカマルから貰った将棋の本を読んでいる
パチリ、パチリと将棋の駒を指す音と
私のめくる本の音以外はあまり聞こえない
私は彼に連れてこられた
この木の葉の里に少しづつ馴染んでいた
私が居候している奈良家は変わり者が多い
変わり者のくせに基本正論で、頭が良い
たまにお袋さんが怖い時もあるがそれはそれ
親父さんの発言にはいつも重みがある
あいつの言葉は…
まあいいか
この本もだいぶボロくなった

…一応新品を貰ったんだがな
いつのまにか駒を打つ音も止まっている

……寝てるのか？
あいつは1人で打つときは考え事をしている
そのためか私と戦った時と同じくらい真剣な表情をしているため
私はいささか近づき辛い
あれから一年と少しくらいの年月が経った
あいつの癖はある程度理解できるようにはなったが…
あいつの真剣な表情を見るのは未だになれない
理由は知らないが何となく気にくわない感じもする
だけど
さっきまでの乾いた音とあいつの気配を感じるのは
悪くないと思っているのは少し不思議だ

再び音が鳴るパチリ、パチリと

あいつは良く空を見上げている
晴れの日も、雨の日も、曇りの日も
何かを見つめるように空を見ている
『昔は雲が好きでよ、自分も雲になりたいなんて考えてた』
とあいつは言っていた
理由を聞いた
『自由で良いなって思っててさ』
あいつは少し笑って
『まぁあれは風に流されて形を変えてるだけなんだけどな?』
あいつは薄く笑い
『…理想ってのを作るのは風を吹かせる事の出来る奴らで』
『その風に乗って動くしかない奴らが雲なんだって思う』
「そしたら、雲になりてぇってのが言い訳だって気づいちまったからさ」
「こんな俺でも努力をしたいと思ったんだ」
私はそれまで力こそ全てだと言われていた忍でしかなかった
だがこいつは先にあるのだと、あの森であった時より痛感した
こいつの修行の理由は何なのだろう?

こいつの求める力はどんなものなのだろう？
シカマルは何を変えたいのだろう？

私には解らない

パチリ、パチリと駒の音は続いていた
以前、あいつは師匠に桂馬のような奴だと言われたらしい
それを聞いて変に納得した自分がいた
あいつは桂馬だ
他の駒と違いただ真っ直ぐには進めないが
他の駒よりも一足先に駆けるように先に進む
いや進もうとする
シカマルは桂馬と同じだ
間違えば命を落とす戦法も成功率によっては自ら選ぶ
あいつは何故、命をかかることを良しとする様になったのだろう？

…なんとなく考えたくないし、答えにたどり着く気もしない
だけど嫌だなと思う
本当に酷いやつだと溜息をつく
私を勝手に木の葉に連れてきておいて
まるで自分は先に死んでもしまっても良いと思っているような
死んでしまっても仕方ないと思っているような
そんな生き方をしているように見えてしまう
私に家族の暖かさを教えたあいつは
その暖かさを1人分消そうとしているようにも感じる
それは…嫌だと私は思う
あいつに、シカマルにそんなつもりは無いだろう
シカマルは無責任な奴じゃ無いと私は感じている
なのに何故サイコロを投げるように命を賭ける事をするのか
忍を捨てた私には解らない
…頭はそんなに良くはなかったが悪くもなかった筈なんだがなと
私は小声で呟いた

「なんか言ったか？」

いつの間に居たのかは判りかねるが私の悩みの種は
私を見下ろし、そう言った
私は顔を見上げて思った、間が悪いとも
なんとなく安心したとも言えない思いになる
あいつの顔が視界に入る
…あぁやはりシカマルにはこの顔が良く似合う

「何も言ってねーよ間抜け面ヤローが」

平和の愛しさを知ってあるが故の優しい顔が

「酷くねぇ？まぁいいや暇なら一手付き合ってくれるか？」

退屈でよーと間延びした優しい声がシカマルには良く似合う

「は！ウチに勝てるとでも思ってんのかよ間抜け面！負けたら餡蜜でも奢るってならやってやる！」

「そりゃまた自信たっぷりだな」

と私に対し呆れ混じりの優しい瞳が『愛おしい』

……愛おしい？

ああこれには気づかなかった

いや、気づけなかった

この想いを私は知らなかったのだから

私は知らないうちに、彼の優しさに溺れる私は

『恋』と『愛』を知ったのかと

いつのまにか奈良シカマルに恋をしていたのかと薄く笑う

「…もう勝ったつもりになったのか？」

こいつの甘さが消えた時の瞳が好きだ

「最初から勝ってるだろ？」と笑えば

「…なんじゃそら並べる前から負けるわけ無いだろ？」と笑う
お前の呆れながらも頭の中で推理する癖が好きだ
だけど
気づかなくていい、知らなくていい
これは私の弱さで宝物なのだから
お前の、お前達の優しさに甘え
暖かさに依存した私が悪いのだろう
…やはりお前は酷い奴だなとまた笑う
対局前に互いに礼を行い言葉を口に出す
『お願いします』お前とは違う意味も持たせながら
甘いお前に対し私は心の中で礼を言う
私の心に暖かさを教えてくれてありがとう
これからも私に温もりを感じさせて下さい
そして恋を教えてくれてありがとう　と
『バチンッ!!!』
…照れ隠しに駒を強く打つ事になってしまったが

…まぁ、これはこれで私らしいと思う事にした

時雨

シカマルは考えることがある
何故あの時、敵を生かし連れ帰ったのか
何故まるで家族のように扱うのか
何故あの子を殺したら一生自分は自分を許せないと思ったのか
その時は解らなかった
そして
解るべきでは無かった
それが奈良シカマルの独白であり
心の底に深く沈めるべき想いの欠片だった
彼に相応しくない言葉といえば向上心だった
彼は凡人に比べて頭脳面では優秀な人間だった
だが彼は上に立つことや責任を嫌った
だから努力もせずに雲のように生きたいと思っていた
1人の友人を助ける為の任務で仲間を失いかけるまでは

『俺は雲になるつもりは無くなったよ親父』
彼なりの決意表明であり宣言でもあった
『…そうか、少しだが残念だ』
彼の父は聡明だ彼以上に深く物事を見据えている
彼に足りないものが経験だという事も
彼に相応しくないものが冷徹さだとも知っていた
だが、決して止めなかった
彼のために
そして彼の守るべきもののために
『忘れるなアスマはお前を桂馬と称したらしいが』
『お前は桂馬でもなんでもないただの歩兵だ』
『今まで鍛錬もサボってたよな?それが結果でお前のツケだ』
『だから守りたいものが出来たなら』
『人一倍努力をし、そして考えろ』
わかってるよ親父
シカマルは精一杯強がってこう言った
「俺は守りたいものを守り抜く力をつけて」

「守り切ってみせるだからさ…あいつを任せる」
「責任って奴かなそれとも義務感なのかは知らねえ」
　だけど
「初めて命を賭けて良いと思ったんだ」
　父は一瞬後悔して
　そして笑った
「そんなもんだぜ？男ってのは単純だからな」
　シカマルも真意を読んだのだろう
「ああ…本当に単純だ、けどそっちの方がわかりやすいよな」
　…これはシカマルにとっての分岐点であり
　多由也にとっての分岐点でもあった

　鉄の匂いがする
　正しくは鉄の匂いと同じ血の匂いだが
　助けてくれと懇願する他里の忍び達
『針影の術』

シカマルは冷徹に影を伸ばしトドメを指す
彼女には出来なかった事を容易く行う
悲鳴は一瞬、痛みも一瞬のはずだ
喉、心臓、頭を影縫の術と同じ要領で串刺しにする
いつからか命を奪う事に躊躇いは無くなった
情けをかければ自分や味方が万が一危険にさらされ死ぬかもしれない
そう思うと彼は脅迫概念に襲われた
『俺は二度と仲間を危機に晒さない』
『そうするくらいなら俺が先陣を切って戦う』
『俺にはその義務と責任がある』
彼は既にサイコロを転がした
命を軽んじてる訳では決してない
だけど自分ならまだ良いと彼は思っていた
『義務、責任、使命それを背負ってアイツを救う』
そんな時に脳裏に浮かぶのは生意気で
口が悪いが優しい女の子だった
きっと彼は死ぬ前になって気づくのだろう

彼女を愛していたと
少なくとも『今は』気づいていない
では気づいた時に彼はどうするのだろうか？
きっと彼はこう言うだろう
『これで漸く割り切れる』
愛していた女に家族を与えた
自分も含めて彼女を愛しいと思った
きっと俺は…彼女を殺さなずにいたのは
自分が愛を知ったからだろう
他里の忍びであろうと彼女を愛してしまったのだろう
だから任務に没頭した
余所見をしないように
彼女を、木の葉を守るために
まだ先の話だがいつしか彼はこう呼ばれるようになる
木の葉の影法師と
冷徹で容赦は無く、無慈悲な男だと伝わっている
本望だと彼は薄ら笑う

彼にとって木の葉の忍び
家族、仲間
そして多由也を守れるならば悪名だろうと轟かせる

そう言えば俺は雲が好きだった
今は嫌いだけどな
風に流されて形を変えて
まるで自由のない弱者のようで嫌いになった
彼は守ると誓った
アスマの仇を取った
心無い言葉で傷ついた家族の報復をした
シカマルは忍らしい忍になった
合理的で何よりも覚悟を誰よりも持っている
そんな忍になった
アカデミー時代の彼を知っている者は驚き
他里の者は彼を恐れた

木の葉にここまで誰かの為に生きている忍は少ない
彼は惚れた女に泣かれたくないのだと悲しそうに笑い
両親に恥じる生き方をしたくないと眉間に皺を寄せ
…敵にとどめを刺す際の冷徹な目を
『…アンタに恨みはない、だがな?』
『木の葉を甘く見たのか?…残念だが』
アンタが悪いんだよと刃を振り下ろす
【　俺はもう、嫌なんだよ　】
【　甘さで、仲間を危機に晒すのはさ　】
彼の前には
まだ温かい血と、死の景色が写った
行くぞと仲間に声をかけられる
「どうした?」
『あぁ、悪い今日は空が曇ってるなってさ』
いつからだろう?
命を奪う事に抵抗が無くなったのは
『今、行く』

それをアイツに悟られたくないと思うようになったのは
叶うなら
アイツはこんな俺に気づかないで欲しいな
そう思うようになったのは

梅雨の木漏れ日

シクシクと雨が降っている
天気を読むことがある程度できるようになったからといって
やはり寝坊をしたら意味がないと彼は目の下に大きなクマを作った
昔は傘を忘れる事は多かった
基本的に彼は面倒臭がり屋なのも変わらないが
最近はもっぱら忘れたことがなかったので
…せめて雨具とかを常備するべきかなと
疲れ切った頭で阿呆な事を考えていた
「なにしてんだよお前…」
ふと、声の方に顔をゆっくりと向ける
「見ての通り傘を忘れたんだよ…」と彼は返した
「…いや、朝から軽く降ってたのにか？」
はて、そうだっただろうか？

まあこいつは嘘はつけない性格だ
口は悪いし、正直それをお前が言うの？って事も言う
恐らく自分に正直なんだろうなと思考を停止する前に
「で？なんでお前ここにいるんだ？『多由也』」
少し親愛を籠めて言葉を繋ぎふと薄く笑う
「お袋さんが良く見てたんだよ目の下にクマが出来るほどなんか考えてたんだろ？」
「…多分それでじゃねえの？いつも以上にどうしたんだろうってさ」
成る程と彼の中でも合点がいった
母は少しばかり過保護だ
捕虜として捕縛した彼女を家族として向かい入れ
なおかつ実子のように思いやり養子として引き取った
今の彼女の名前は奈良多由也と言う
あまり好んではいないようだが…まぁそれはそれと思う事にした
「じゃあ帰るか…」
「おいコラ！ここまでわざわざ来てやったのに礼も無しか！」
…まぁそうなるよな
「帰ってからな渡す物もあるしさ」

「はあ？渡す物？」
　コイツ…なんの日か忘れてやがるな…!!
「ま、礼をするなら入れてやるよ！さっさと帰ろうぜ？」
　今日は晩飯ハンバーグだぞーと笑っている
　やはり彼女は年相応の優しい顔をしている
　喜怒哀楽の表情が彼女は解りやすい
　どれくらいかと言うとナルトみたくで隠し事もできないくらいには
「…茹で卵入ってないよな？」
　以前のトラウマが少し頭をよぎった
「ねぇよ」
　良かったと胸をなでおろす
　以前コイツがお袋とハンバーグを作った際に
　スコッチエッグを作ってやがったのが未だにトラウマだ…
「なんだよ？まだ茹で卵食えねえのか？」
　うん食べたくないですと思った
「好きじゃねえだけだよ…別に死ぬ気で食えば食える…」
　いや、そこまで覚悟決めないと食えないんだけどな？

ふと、気づいたてしまった
「雨、止んだな」
「へ？」
「いや、雨降ってねぇなぁって」
「…マジかー」
せっかく持ってきてくれたのに申し訳ないなと思うが
こればかりは天候の関係だからな…
「まぁ助かったよどのみちな」
「は？雨が止んだのにか？」
伝えるつもりはないが…
「ああ、少し落ち着いた」
頭に？マークを浮かべているのが表情で分かる
「あーそう言えば火影様に上忍推薦がきてな？受けるか迷ってるんだが」
お前はどう思う？と視線で問いかける
「…まあ最近は稽古もしっかりしてるし腕も悪くねえしな」
別段問題ねぇんじゃねえの？と多由也は言った
見間違いかもしれないが一瞬だが嬉しそうに口を緩ませたように見えた

「お前さんさ髪飾りとか付けるか？」
はぁ？と複雑そうな視線をこちらに送ってくる
「木の葉に来てもう一年半だ記念日でもと思ってな」
本も悪くないかなと思ったのだが
意外に読書家で持ってない本が判らなかったので
彼女に髪飾りを買ってある
「しなくはないわな」
「気にいるか解らないけどさ自分なりに買ってみたんだわ」
「着けてくれると…まあ嬉しいかな」
少し間が空き
「…家に着いてから話すんじゃなかったか？」
と少し紅くなっているように見える顔を見て吹いてしまった
『…おいこら、喧嘩売ってるのか？買うぞ？』
呪印の発動はやめて下さい死んでしまいます…
「悪い悪い…少し気が早ったわ」俺は少し笑う
「まあ、いいけどよ」いや良いのかよ…
こっちはお前が呪印発動してたから割と真剣だったんだけど？

雲が割れた
「じゃあ帰るか」
だなと少し笑っているお前を見て癒される
プレザントやサプライズが上手くいくかは解らねえけど
まぁ、退屈な時のようにはならねえだろ
そう思いながら好きな奴と帰るってのは
幸せなんだなって改めて思った

甘栗

今日は奈良家の行う儀式の日だった
奈良家は木の葉隠れの里の森の一部を管理している
なんでも先祖が仕切り屋だったらしく一任されたとか…
そこには栗の木が生えており
鹿たちが普段は見張り兼、縄張りとして暮らしている
一種の聖域と言うやつだ
遠くから声が聞こえる
「おーい!!間抜けー!!……!!」
いや、その距離でよく聞こえると思うなと…
あれー?アイツって頭良かったよな?
と、少々呆れるシカマルの内心は隠し大声で
「いやー!聞こえねぇから!もう少しこっち来てくれ!」
なんで悪口と呼び声だけ聞こえるんだとそれに関しても笑った

ズカズカと思いっきり女らしくない歩き方でこちらに来る
「たく！お袋さんが昼飯持って行ってくれって言われたから来たのになんなんだオメーは!!」
いや、それならなおのこと近寄れよ…
「…おい、なんか失礼なこと考えてねえか？」
うわぁイノやサクラが切れかけてる時の顔そっくりじゃねーか…
「失礼なことってのの定義が広すぎるからな…生憎俺じゃあ判断しかねるな」
「おし、なら言ってみろ」
藪蛇でしたか…
「いやあの距離で聞こえるのがなんで肝心なところは抜けてるんだろうなってな…」
よし、これなら無難なはずだし答えにも嘘は言ってない…!!
『あぁ!?』
いや、呪印解放は辞めろ!?綱手様が探知してこっちに来るぞ!?
「おっと…あの暴力婆にまたぶちのめされるところだったぜ…」
あ、やっぱ怖いんだな…気持ちは解るが速攻で戻るとかどんだけのトラウマなんだ…？
ちなみにこの森にコイツが来るようになったのは半年程前

最初は頑なに拒否してたし何よりそこまで打ち解けてもいなかったからな…
「で？昼飯って帰ってからじゃなかったか？」
なんとなしに母親が朝に言っていたことを思い出しながら尋ねる
「あー…ゆっくりでも良いから管理を終わらせて来いってよ」
それなら飯を外で食べてきても構わないって言ってたぜ？と言う
…？お袋らしいような何か違うような？
まぁ腹が減っていたのは事実だしありがたく頂こう…
家まで戻るの正直、面倒くさいし…まだ仕事あるしこっちの方が効率が良い…っておい!!
「多由也さんや」
「なんだその口調？気持ちわりーぞ？」
ひでぇ…
「これ、お前の料理だよな？」
「はあ？ウチがテメーのために作ると思ってんのか？」
お前さ、自意識過剰だろと呟いてるけど…
「そうか？まぁ腹減ってるし食べるけどよ…家に帰ったらお袋が飯作ってたのにとか無いよな？」

コイツ一瞬だけどビクッ!!ってしたな…
これは…
「実はお袋のじゃ無いとか、家に帰るとお袋の料理があるとか無いよな?」
まぁ、今の動作ってか反応で判ってるけどな? 一応確認しねぇと…
「まぁ…お前ならイケるだろ」
いやいや無理です!!
力仕事の後のお袋の労い料理の多さを知ってるだろ!?
…いや食うけどさ
「…多少は残すぞ? 流石に仕事終わりにお袋の説教はゴメンだ」
やれやれ、と心から溜息をつく
「ウチが作った弁当を残して平気だと思ってるのか…?」
いや! マジでこういう時は面倒くせえなおまえ!!?
「いやきっちり食うよ…少し時間を置いてからな?」
夕飯はチョウジやイノ辺りと食うって言わねえとなぁ…
「!!そうか…ならいい!」
あーちくしょうめ
こういう時だけ可愛い表情を隠すさないってのは狡いよな…

…そろそろオヤジに相談でもしてみますかね
スタミナもそれなりについてきた訳だし
新しい戦術を考えるのも悪くは無いだろう
爺さんが使ってた忍術…影鬼だっけか？
祖父は戦闘専門の忍だったらしく様々な兵法書を書き残している
一手どころか三手先まで敵がないなくても見通しているような
この人、絶対に将棋強いだろうなってと感じ
もし生きていたら一手指してみたかったと思ってしまうほどに既に居ない人と打ってみたいってのは初めてだった
「とりあえずもう少しで終わるけど飯ってことで休憩すっかな」
「おー食え食え!!自信作だ!!」
悪くないんだけどな…気ままに過ごして後々後悔ってのはもうゴメンだ
答えは…まだ出てないけどな
爺さんの兵法書、改めて読んでまた修行かな
コイツの笑顔の為にも、な

影鬼

影鬼、古くから存在する、木の葉では三代目が立案し月明かりの夜に行われ多く「影や唐禄神（道陸神、道禄神）、十三夜の牡丹餅」などと囃しながら行われたという遊戯
まぁ簡潔に言えば子供の昔ながらの遊びだ
影を踏めば動いてはならない
鬼以外が影を踏めば其の者は動けるようになる
他にも里によってはルールは違うがよく知っている遊びの1つ
めんどくせぇからやった事ねぇけど
俺の祖父はそれを頻繁にやっていたらしい
なんでも『遊びをしている時に何か考えが纏まる時もある』と
それがなぜ影鬼なのかは理解できないが
俺も考えが纏まるのは将棋を打っている途中だったり
一局を打ち終えた時だから気持ちは良く解る
『忍法、影鬼』
俺は自らの影に沈み、自らの影から木々の影の中を移動する

影鬼は影の中に忍び、誘導した敵への奇襲や
待ち伏せによる暗殺を行う忍術として創られたらしい
相手の動きを強制的に動けなくする忍法で
影縛りと影縫いを応用した術の殺傷力の高い技だ
他にも影沈み、影移し、ｅｔｃ…
よくもまぁここまで編み出したものだと半分呆れ
…半分はそれだけ戦わなければならなかった祖父に敬意を抱いた
動乱の時代を生き抜いた祖父は温厚な性格だったと親父から聞いた
それなのに術や兵法書には冷徹に敵を倒す術しか載っていない
きっと割り切っていたのだろうと思う
生きる為に殺す、守る為に殺す
そうしなければ家族を『大切なものを守れない』と
きっと答えを知っていたのだと思う
俺は面倒くさいことは嫌いだ
だけどそれよりも仲間や友人の死で涙を流すのはもう嫌だ
チャクラ刀で影を抜い固定する『影居抜き』と
影首縛りを途中で影縫いの術にし敵を排除する忍術も祖父の兵法書で学んだ

冷徹に冷静に、そして誰よりも鉄を打つように自らを鍛える
…そう言えばイノに言われたな
『変わったね』と
変わるほか無かったんだ
チョウジに言われたな
『いつでも頼ってね』と
わかってるつもりだよ親友
だけど
俺はお前達の手を私怨で汚すつもりはない
火の意思はここにある
俺の玉は取らせない
俺の在り方は変わらない
だが、それ以上に
俺は俺で在り続ける
アスマ、俺は変わらないよ
託された意思はあの子にも伝える
勇敢な木の葉の忍だったとアンタの玉に伝える

だから
安らかに眠ってくれ
『おい』
「なんだ?多由也」
『…言えた義理じゃないけどお前さ、辛いなら泣いていいんだぞ?』
「…生憎だが泣き虫とかもう言われたくねぇんだよ」
なにより割り切ったんだ
そこに新しく哀しみを持ってくる必要はない筈だ
俺が泣けば他の誰かも泣く、哀しみは断ち切らない限り
そこに存在し続ける
アスマはそれだけの人望があった
『泣き虫?…ああ普段なら言ったかもな』
だろう?だから…
『だけどよ、壊れる前に泣いた方がいい』
『お前は今、昔のウチと同じ在り方になっている』
『私情を捨て、忍びではなく道具になろうとしている』
…

『それは弱さだと言ったお前がそうなってどうすんだよ…』
……あぁ
そうか
また、間違えようとしていたのか
「んー解った、けど今は泣けないんだよ」
「泣ける時にまあ泣くさ」
弱音はもう吐かない
守るために強くなる
それが矛盾していても
必ず俺は強くなる
ならざる終えないのだから
なるしかないと
義務感などではなく
俺は俺が信じるものの為に生きる方法として強くなりたい
「今度、組手を頼んでもいいか?」
『かまわねぇ』
こいつを守りたい

指を咥えて震えてるのはやっぱりダセェ
「晩飯なにかな？」
『あー？確かあれだ、回鍋肉？だっけ？』
「あー言ってたな」
『…お袋さんに出かける前にも聞いてなかったか？』
「他のこと考えてたからな、うろ覚えだったわ」
『…怖いもの知らずだな…お前』
「お袋については今更だ」
帰ったら何をしよう？
詰将棋か？
『おい』
「あん？」
『帰ったら一局指すぞ』
「別にいいけど決定事項なのな」
『いまなら楽勝な気がしてな』
ほー…
「それなら負けた方は罰ゲームにするか？」

『その言葉、取り消すなよ?』
薄く笑うこいつを見て誓う
俺の玉【女】には手を出させない
たとえそれが暁であろうと伝説の忍であろうとも、な

天気雨

◆　シカク視点

『シカマルは任務中、可能な限りリスクを取らず可能な限り安全策を選ぶ』

それが俺の見解だった

音のあの子を連れてくるまでは考え通りの戦い方だった

ある日、久々にあいつと将棋を指すと差し方が変わった事に気づいた

リスキーでありながらその分、返し手を間違えた手で返したなら

その局は負けるかもしれないという素晴らしい一手だった

最初はたまたまかと思ったが3局目から理解した

コイツはコイツの可能性を探っていると

その理由があの子である事も

アイツが無難な生き方を辞めたのはその辺りからだろう

シカマルは親父の兵法書を貸してくれと頼んできた

テメェの爺さんの話に興味を持たなかったコイツは何を言っているんだ？

そんなふうに思った
だが、気持ちは解る
親として忍びとして親父の兵法書を『快く』貸してやった
…まぁ意地が悪かったのは認める
だが俺はこの時シカマルに期待をした
【もしかしたら】と俺はシカマルの背中に自分の父を幻視した

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

◆　多由也視点
あの森での戦いは扇子女の横槍で有耶無耶になったが
あの時の結果、そのもしもを考える
あのまま続けていればシカマルは間違いなく私に殺されていただろう
それを嫌だと思うようになったのは私が甘くなったからだろう
アイツはいつの日か私に言った
『俺は男だからな、いつまでも立ち止まるわけにはいかねぇ』

『怯えて進まないなんて、もう許されねぇ』
『…迷惑かも知れねえけどな俺はお前により一層
生きていて欲しくなった』
……なんて我儘なんだろうと頭を悩ませた
シカマルはいつも我儘だ
敵である私を木の葉に連れ帰った
私の呪印を火影に頼み封印してもらい実家で監視下に置き
かつての主人、大蛇丸の研究施設の場所を聞き出し
それを小隊結成しひとつひとつと潰し回った
そのお陰で有能性を示せた事のみが、かつての私とシカマルが得た収穫だった
私は戻れば殺されることは理解していた
だから
『シカマルに協力した』
よくよく考えればあの森で私は詰んでいたのだろう
戻れば死が、捕虜になれば生き長らえる
その2択しかなかった
けどその2択で私は今という幸せを享受している

家族の温もりと安らぎ、愛おしさをここで思い出した
かつての私の家族と奈良家の家族は違うが
この気持ちは家族とでしか味わえない
そんな宝物なのだと思う
あの時、シカマルの手を取ったのはきっと必然だった
自分の中の本能に従った結果だったんだろうと今は思う
さて、そろそろシカマルが帰ってくる筈だ
アイツが与えた安寧な日々と退屈な時間の埋め合わせをして貰おう
「たでーま」と気の抜ける声が聞こえる
「おいお前がどれだけ修業しようと良いけどな?
お前は忘れてるかも知れねえからいうけどな…」

「?おうなんだよ?」
「ウチは外に1人じゃまともに出れねぇんだよ!
…つーわけでいまから暇潰しに付き合え!!」
「マジかよ…せめて飯の後にしねぇか?」
「ほー?そうか…ウチの自由を奪った事に対する

罪悪感なんてお前にはその程度なのか…」
「だー!!解ったよ!ただしだ!!お袋にキレられない程度に済ますからな!?」
「当たり前だろ?何言ってんだお前?常識がねぇのか?」
「今のお前に常識を語られたくねぇよ!!」
…こんな日々が私は好きだ
シカマルの優しさと温かいコイツの心が本当に好きなんだと思う
いつの日か平和な世になったら私はこの里を去ると決めている
その日はきっと近いのかも知れないと、私の心によぎる
だけど何故かそんな時でも私はここに居る
なにも根拠も無いのに何故かそう思ってしまった。

空想、想像、夢幻

忍界大戦
木の葉だけの忍達の力だけではなく
砂、岩、霧、雲、雨、鉄
それら全てが同盟を組み戦う壮大な戦争
うちはマダラを倒す、ただそれだけのための戦い
だが、何よりも困難な戦いだった
穢土転生の忍はまだ何とかなった
だけど終盤、うちはマダラとの戦闘では
…結局、俺はまるで役に立てなかった
ナルトの援護にまわるのが最善の行いだったとは思う
あれだけ努力しても救えない命があった
多くの仲間が死に親父も死んだ
掛け替えの無いものを多く失い

俺の頭の中は何もかも絶望に向かっていった
ナルトがヒナタに叱咤されて立ち直ったように
あの時、多由也に叱咤されなければきっと
あの場所から俺は動けず無力さを味わいながら
ただ無意味に死んだだろう
そう思った
あの時、俺は心の底から救われた
もっと先へ
せめてナルトが戦いやすいように
俺は戦場を駆け抜けた
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
いつか親父さんが言っていた
『多由也ちゃん、アイツ…シカマルの本質は臆病でな?有効でも安全を第一に考える』
『存外、気づかれてないつもりなんだろうが負けたく無い、失いたく無いと心から思ってる』
……なぜそんな事を私に言うのかと尋ねた
『ん?そりゃ俺が死ぬかもしれないからさ』

『作戦本部とは言え死ぬ可能性はある、俺なら頭から叩くしな』
『だから俺がいなくなったらあの未熟者を頼む』
『君にしか、できない事だからね』
……本当に殺されてどうするんだよシカクさん
シカクさんが発案した最期の策は上手くいった
だけどアイツは私からみれば此処で死んだ方が楽だと言う顔をしていた
苦しくて、辛くて、泣きたくて、だけど泣いても帰ってこないから泣かない
いや、泣けないって顔だった
前に進まなければ許されない、そんな顔をしていた
少なくとも私にはそう見えた
気持ちは理解できた
怒りも苦しみもその分、アイツに言葉にしなければいけなかった
何を言ったかは覚えていない
ただ前に進むための後押しを
だから生きる為の一押しを怒鳴りつけるように語った
シカマルに生きていて欲しいから
私は必死に喉が潰れるくらいに声を張り上げて

感じたことを、思ったことを私なりの言葉にして
シカマルが立ち上がれるように言葉を伝えた
それが効いたかはわからないが
死んだ目は生き返り
アイツは安心したような、決意が決まり覚悟を決めた顔をして
敵を見据えナルトをひたすらに援護した
可能な限り進むために
私もアイツも希望にかけてみた
みんなで勝とうと必死になった
無限月詠なんて反則技が出るまでは
ーーーーーーーーーーーーーー

明るくて心地良い場所にいた
場所の名前までは覚えていなかったが
ここが木の葉隠れの里にある
あのお気に入りの場所だと気付いたのはすぐだった
ふと気づくとシカマルが私の隣を歩いていた

「なにぼんやりしてんだよ」と揶揄うように笑いながら
シカマルは少し今より歳をとって顔つきも少し変わっていて
なかなか男前って感じの面構えになっていた
そして私の好きな綺麗な景色と
美味しいご飯と鳥の声
そして
私の『幼い頃にそっくりな少女』とシカマルと私で食事をとっていた
この子は誰だろう?と私が考えていると少女は口を開けて聞いてきた
「お母さんどうかしたの?」
……は?お母さん?つまり私の娘?
「お父さん~お母さんがいつもより変だよ?」
「だからな?母親に変とか言うなよ…お前の事を産んでくれたんだぞ?」
「でも調子が悪いのか多由也?なんかお前、少し怖い顔してるぞ?」
まるで昔みたいなとシカマルは私に話しかけてきた
…コイツの言う昔とはいつだろう?
「いや、なんでもねぇよ」
「それよりも飯をさっさと食べようぜ?『縁』」

私は驚いた自然と口から出た言葉に
縁とは誰だ？この少女の名前か？
なぜ私はこの少女の名前を知っている？
なぜ違和感を感じない？
まるでこれはかつて私が望んだ…家族との温かさで
『惚れた男の子供を産んで幸せな家庭を作る』
これは私にはもう望むことは許されず
とうの昔に諦めた願望だった筈なのに
「おりゃー!!」
「痛え!?」
「こら!!多由也をなんで急に殴った!?というかなんで避けねぇんだよ!?」
「なんか顔が赤くてムカついたから!!」
…赤いのか私の顔
「いや、理由になってないからな？そこに正座」
「嫌です」
「なら心から謝罪な」
「……」

「謝罪な？」
「…怒ってる？」
「もちろん怒ってる、家族を殴る時は道を間違えた時だ」
「…解った謝る、お母さん御免なさい…」
「…はぁ、今回はお父さんに免じて許してやるよ」
この子の気質を理解できた気がする
「全くこのファザコン娘が」と小声で話す
「私はファザコンじゃないです！お父さんが好きなだけです!!」
娘は器用に小声で叫ぶ
「何話してんだ？」と聞いてくる
私の『旦那』には誤魔化すように何でもないと笑う
「…いつかお父さんは私が貰いますからね！」
小声で私に話す『娘』が愛おしくて
「できるものならやってみな」と
私は不敵な笑みを浮かべながら愛しの娘に伝えた
最初に感じていたふとした違和感など
既に感じなくなっていた事には気がつかなかった

━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━

…ここは？

なんで俺は実家にいる？

うちはマダラはどうなった？十尾は？

「おい、なに腑抜けた面してるシカマル」

親父…？いや親父は死んだ筈だ

「…？なんだよ幽霊でも出たような顔しやがって」

…なんだこれは

「それより早く多由也ちゃんの所に行ってやれ、母ちゃんに怒られるぞ？」

笑いながら去っていく親父を見送り

なにか違和感を感じた

親父はあそこまで老けていたか？

いや…もう親父も結構な歳だ

なら『白髪が生えててもおかしくはない筈だろう』

目の前にある将棋盤の駒を片付け

『お袋と多由也に呼ばれた場所を目指す』
ふと違和感を覚える
なぜ俺は『2人に呼ばれたんだったか』と
「遅い!!なにやってたのボンクラ息子!!」
「義母さん無駄です、コイツは集中したら延々とそれに没頭しますから」
「…どうせ待ってる間に縁側で詰将棋でも指してたんだろ?」
そんな軽口を叩きながら多由也はほんのりと顔を赤らめている
お袋は頭を抱えながら
あんたって子は…と頭を押さえながら小声で呟いている
…聞こえてるからな?
「それで?」と多由也は聞いてきた
「何がだよ?」と俺は返す
「似合ってるかどうかだよ!」と怒りながら拗ねる様子を見せる
多由也に言う言葉は決まっていた
「そりゃ似合ってるよ」これは間違いなく俺の本心
…だけどこの頭によぎる違和感はなんだろうか?
お袋が『え…? いやそれだけ?』と言いたげな顔をしている

似合っているし綺麗だとは心の底から思う
ただ『白無垢』なのかは理解できない
まるで祝言でもあげるような…そんな格好と雰囲気
ふと玄関から物音がした
イノとサクラ、ヒナタが入ってくる
女が3人揃うと姦しいと言うが…確かにやかましい
まぁヒナタを除けばいつもの光景だ
良かったね！とサクラが言う
本当にアレでいいの？もっといい男居ると思うよ？
イノは揶揄うように言う
ヒナタはおめでとう!!と嬉しそうに微笑んでいる
「あー少しいいか？ソイツと結婚できないなら生涯独身のつもりだ」
だから水を差すのをやめろと暗に伝えるよう
『多由也が皆んなに向かって言う』
…正直なところこの状況に理解は追いつかない
ただ…何故か納得している自分がいる
その事も不思議だ

だけど俺は次の瞬間に自分の口から出た言葉に俺は驚いた
それは俺には永遠に伝えられないだろうと思っていた言葉だったから
「俺もお前と結婚出来ないならよ、生涯独身のつもりだ」
「それに惚れた女は大切にする、俺の覚悟は甘くねぇよ」
その言葉は本心から来るものだった
偽りのない本音だった
そうだ俺の覚悟はとうに決まっている
そのために柄にも無い努力をして護るための力をつけた
いつの日か思った願い
『俺は多由也と人生を添い遂げたい』
そのために俺は多由也と出会った
甘ったれてたガキの頃からひたすら努力した
そして目に見える人を助けられる、護れる力が欲しかった
俺は些か欲張りになってきたなと笑った覚えがある
既にあの森から、あの任務から帰ってきた時から
『雲になりたい』なんて思わなくなっていた
だから喧しくしている大切な友人達に告げた

「心配すんな、だけど俺がコイツを不幸にするような真似をしたらぶん殴って目を覚ませてくれ」
まあ、その前に多由也にぶっ飛ばされるだろうけどなと
少し揶揄うように笑いながら皆んなに言った
…俺は決してコイツを不幸になんてさせない
「ずっと笑っていて欲しいし、誰よりも幸せでいて欲しいからさ」
だから頼むと頭を下げ、古くからの友人達にそう言った
まったく…人任せかーと笑いながら言うイノや
惚気かい…しゃんなろーと苦笑いをするサクラ
うん！任せて!!と意気込むヒナタ
「そこにいるお前らもだからな？」
「殴ってでも目を覚まさせてくれよ」と少し前から襖を覗くダチ達に言う
…いや全員何も言わず親指を立てるなよ
しかも打ち合わせをしたかのように同時にするな
おいキバお前のそれはくたばれって意味のハンドサインだろうが！
…本当、良い友人達だよ全く
俺は幸せ者だなと笑っていた

俺はそんな幸せを享受した
最初の違和感なんて既に何処にも無かった
そこにあるのは『叶うことを夢見た景色』
それだけだった

間違い探し、答え合わせ

ナルトとサスケ、サクラとカカシ先生が終わらせた忍界大戦の結末は忍連合の勝ちだった
俺たちは無限月詠という幻術にかかり結局は何もできなかったし
サスケとの最後の喧嘩でナルトは片腕を失った
俺たちに力があればとみんなが心苦しんでいた時に
ナルトの言葉に救われた
『なんつーかさ諦めちまいそうになった時
流石に幻だとは思うんだけどさ
お前を含めた里のみんなが
あの時俺の背中を押してくれたから
勇気がわいた
そのおかげで改めて諦めないって思ったし
まだ終われないって思えたんだ

それでやっとサスケを連れ戻せたし
サクラちゃんとの約束も果たせた
だからみんなにはむしろ感謝してるってばよ!!』
ーーナルトは嘘をつけない性格だ
本心の言葉で思いなのだろう
戦争の中で感じた苦痛が和らいだ気がした

ーーーーーーーーーーーーーー

話は変わるが最近、多由也がおかしい
何というか、具体的には言い表せないのだが
そう。ナルトを見るヒナタに似ているような…
少し違うような…近いような…?
とりあえずそんな感じがする
あの夢の中で何か見たのかもしれないが
少なくとも俺から聞く気はねぇ

あれが何だったのか
あれは何のためのものだったのか
正直に言うとわからねぇからな
考えても何度も考えてもわからない
何故あの時
俺はあんな夢を見たんだろうかと
ふと考える
あれが俺の願いだとしたら
…悪い冗談だ
あれが俺の願望ならおこがましいにも程があるだろうと
俺はあいつの幸せを祈ることは許されると思う
だけど
あいつと共に幸せになろうと思ってはいけない
あいつの人生を狂わせたのは
他でもないこの俺なんだから
幸せを探してやることは出来ると思う
だけど、それを拒む俺もいる

ああ、本当に無理やり眠らされて見る夢なんて
もう2度とごめんだと
あの夢での出来事は俺を大いに悩ませて
俺を大いに困らせるなと
気づかぬうちにまた苦笑いをしていた。

――――――――――――――――――――――――

あの巫山戯た幻術のせいで偶に顔から火が出そうになる
まさかあんな願望がまだ私にあったなんて思わなかった
棄てた感情、諦めた願い
そして何よりもあいつが相手で幸福だったなんて
まったく悪い冗談だと思う反面
心にストンと落ちるような感覚がある
あいつといると落ち着く
あいつがいないと思いにふける
あいつと指す将棋は負けたくないと言う気持ちと

和やかなこの時間が続くといいなと思う
この感情が親愛が友愛かは少しわからねぇ
だけどあの夢の中の私は誰よりも幸せだった
此処に戻って来て思う
私はきっと木の葉で過ごすうちに
心の底から奈良シカマルが好きになったのだろうと
仏頂面でそれでいて優しく
悲しい時は不器用だけど優しい言葉で胸の奥を温めてくれる
そんなあいつが好きなのだろう
奇しくも思い出した
シカクさんも今は亡き母も
『恋愛ってのは惚れたほうの負けなんだよ』
たまに例外もあるけどねと笑っていた母
尻に敷かれていても幸せそうだったシカクさん
そうだ
惚れたら負け
あとは愛し、愛されるために努力するだけだ

「どうした?…なんつーかスッキリした感じ?な顔してるけど」
「ん?…もうなんでもねぇよ解決した」
「つーかなんだよその訳わからねぇ言い回し」
「…他になんて言えば良いのかよくわからねぇ顔だったんだよ」
「なんだそりゃ……あーそうそう」
疑問符がシカマルの頭の上にある気がする
なるほど確かに形容しがたいなこの顔は…
『覚悟しとけよシカマル』
「…何をだよ!?」
「すぐ解ると思うぜ?」
「怖えよ!?何されるの俺!!?」
うるさいよ!!とヨシノさんの声がする
シカマルは「…アレのことか?」と一応確認を取ってくる
私は不敵な笑みを浮かべて
「まさかアレ以上なのは約束するぜ?」
私は負けてしまったのだから
お前にも私に負けてもらう

それであいこだろ?と心の中で宣戦布告をした。

迷い、憂鬱、夢現

シカマルは大きく変わった
ヨシノさんの頼みを簡単に引き受けるようにもなったし
私の頼みも可能な限り聞き入れてくれる
そんなシカマルの変化に寂しさを覚えるのは
流石に贅沢な話だろうとは思う
私が好きになった男の変化を良く思う反面
少し寂しさを感じるだけ
周りから見たらきっと優しくて思いやりのある
そんな男に見えているだろうと思う
だけど私は知っている
ふと、シカマルは空を見る
その表情はとても寂しそうで
辛そうで、哀しそうで

どこか遠くを見ているようなそんな気がする
時間があれば1人黙々と将棋を指している
そしてよく慰霊碑に足を運んでいる
多分だがシカクさんと話したかったのだと思う
もっと語り合いたかったのだと思う
それは決して悪い事ではないと私は思う
だけど死人と語らうのは無理だ
そんなアイツの哀愁漂う顔が悲しくて
愛しくも感じてしまう私は
少し、いや大きく自分を恥じている
心から愛していると気づいた想い他人の悲しげな顔を
愛しいと感じるなど…
本当に私は酷い女だと
心の中で私は恥じた
ーーーーーーーーーーー

人とは現金なもので昔はわからず理解できない事柄

俺は解らないと理解できないフリをして
興味がないと思うフリをして
その感情に蓋をしてきた
『俺には関係が無い』と目を背け
そうやって過ごしてきた
いつか来るその時にわかれば良いと
気づけばクセの様に空を見上げている
雲を見るわけでもなく、ただ見上げる
そこにいるわけでも無いのに
そこにある何かを見上げている
時たまに親父に言えなかった事を心の中で報告をする
…まぁようやく気付けたんだと思うが
俺はアイツが好きだよ
お袋を大切にしていた親父の気持ちが分かった気がする
アイツを愛おしく感じ想うことが
これほどに幸福と感じるとは思わなかった
それでも

俺はどうすれば良いかはわからないんだけどな
誰よりもアイツの幸せを願っている
きっと世界の誰よりも
だけどアイツの隣に立つ方法が解らない
多分だけどずっと
俺には立つ方法が解らないと思う
だから俺以上にアイツを幸福にしてくれる人を探してる
きっとそれで俺の初恋ってやつは幕を下ろす思う
…きっと親父が生きてたら拳骨を貰ったかもな
だけどそれが道理じゃないかって思う
俺はアイツを傷つけた
アイツの誇りを傷つけた本人だろう
俺の本心は墓まで持っていく
そっちで怒られようと殴られようと
俺が後悔をしないように
俺はアイツを幸せにしてくれるやつに託したい
…そう思いながらも胸の中で燻る炎は燃え続けている

あの出会いがなければアイツとは会えなかった
だけど何故あの出会いしかなかったのだろうと
アイツがなんで木の葉の里で生まれなかったのかと
…なぜ俺が音の里にいなかったのかと
また空を見る
空の先の星を見えるわけないのに見上げている
あり得ない可能性を見つめる事から目を背ける様に
俺はあの空の果てを見つめている
意味もなくただ俺を否定する事を思いながら

焙じ茶

『哀しみや憎しみは時間と共に薄れるものだよ』
　そんな事を言った人がいた
『怒りは憎悪は永遠に自らを縛りつけるものだ』
　そう言った人もいた
　俺はどちらも正しいと思う
　例え哀しみを一時的に忘れようと思い出す
　憎しみも然りだ
　辛く苦しく重く、そして何よりも寒気がする
　そんな事、ガキの頃から理解していた
　理不尽に奪われたものがある
　意味もなく壊されたものがある
　それでもそれは俺にとって大切ではなかったから
　俺はそれをどうでも良いと

くだらないと一笑していた
いつからだろう
理不尽を許せなくなったのは
いつからだろう
不条理を許せなくなったのは
まるで大切なものを自覚したような
そんな怒りを覚えたのは
遠い日のいつだっただろうか？
ーーーーーーーーー
流れゆく季節の中で馴染みの甘味処に来ていた
甘い物よりも塩っぱい物の方が好みな俺だが
此処の甘味は好きで
甘さがスッと抜ける
そんな後味のしつこくない感じが好きだ
疲れた時や悩んだ時は団子を頼んで茶を啜るに限る
「…そう思ってたんだけどなぁ」
「何か言ったか？」

いや？と否定する形で誤魔化す
「悩んでるならちゃんと言えよ？助けられることなら助けてやる」
それが出来ない相手なんだよと頭痛の種がまた増える
恐らくはイノかサクラあるいはテンテン辺りの仕業だろう
少し前から多由也の服の趣味が変わったのは
露出は少ないが愛らしい格好をしている
その愛らしさに心奪われ胸が締め付けられる
これが悩みの種などと言えるはずもなく
「ああ、その時は頼むわ」
そう言って誤魔化す
何が悲しくて好きな女にこんな相談をせねばならんのか
…渋めのお茶が俺の心を写すが如く
苦々しく喉を通っていき甘い団子が欲しくなった
愛しいと思いながら
美しいと思いながら
口に出来ない自らの不器用さと周りのお節介が酷く疎ましい
いっそ言葉にし否定されたらどんなに楽だろうかと思ってしまう

共に歩めたら生きられたらどれだけ良いだろうと願ってしまう
「随分と可愛らしいな服を着てんのなお前」
「あ？なんだテメェ？似合わないってか？」
「思ってねぇよそんなこと」
「じゃあなんだよオイ」
「そうだな…似合うってのもあるんだけどよ
お前も綺麗にになったからかより栄えると思っただけだ」
世辞でもなんでも無い心からの本音
不快にさせていないか不安もあるが…
まあ、言わないよりはマシだろうと思い口にした
「もう日も暮れるし帰ろうぜ？」
「ああ…解った」
会計を済ませ店主に『また来る』と挨拶をして家に向かう
「多由也、ちっと歩くの速くねぇか？」
「お袋さんが待ってるだろうし団子も届けたいからな」
景色は夕焼けの日に染まりただ思うのは
あの時、多由也の頬が朱に染まって見えたのは

きっと俺の気のせいだと
（ままならぬ思いは未だ此処にありってか…）
俺はふとそう思ったのだ。

月明かりはまだ見えず

「多由也ちゃんウチのシカマルを貰ってくれない？」
……はい？と硬直した私は悪くない
いきなりの発言と好きな男を勧めてこられたのだ
硬直しなかっただけマシだろうと思った
「あの子もそろそろ良い年なのに決まった女を連れて来ないから少し不安でね…」
…どうやらヨシノさんは知らないらしい
アイツ、奈良シカマルは存外モテているという事を
仲間に優しく細かな配慮ができる
大人になって顔も良い面構えになってきた
これでモテないとなれば周りの見る目がないか
その気が全くないという事だろう
好きな女が居るのか、それとも忘れられない女が居るのか
そのどちらかだろうと踏んでいる

砂のテマリとか言う女が良く木の葉に来る
使者としてだが気があるのかもしれない
それどころか『自称』彼女が沢山いる
自称とはシカマルが全くその気が無く
興味のかけらも無いのに関わらず
私は奈良シカマルの彼女だと言いふらした奴らの事だ
それに対して『変な噂を流すのは辞めてくれねぇか？』と言った
そこまでアイツが言うのなら何かしら理由があるのだろうと踏むのが普通だ
自称彼女達は捨てられたれとか言いふらしたそうだが
お節介なサクラやイノにテンテン
気弱なヒナタまで参戦し巫山戯るな!!と怒鳴り散らしたそうだ
…まあ誰も信じていなかった上に同情されたのはシカマルだったらしいが…
シカマルの友人は人を陥れるような行いを嫌う
実に不愉快だったのだろう
それはシカマルも
不本意ながら私もそうだった
まあ私が不本意だったのは別の理由もあったからだが

「…シカマルならそれなりにモテてますよ？それこそ職場の奴等からチョコとか貰ってるみたいですし」
「それとコレは違う話よ？選り好みで時期を逃すのはね…」
「選り好みをしているなら好きな奴がいるんじゃないんですか？」
チクリと胸が痛む
「そうかもしれないけど…」
「アイツの人生です好きなヤツと結婚して欲しいと思います」
「多由也ちゃんはシカマルの事は嫌いなの？なら諦めるけど…」
ヨシノさんは私の痛いところをついてくる
「嫌いではありませんよ」
ただ
「アイツが私を好きだとは思えないんです」
アイツのためにお洒落をした
料理の修行も裁縫も花嫁修行をした
だけどそのたびにアイツは寂しそうに見ていた
まるで父親のようなそんな視線が悲しかった
大声でお前のためにやってるんだぞ！と言いたくなるほどに

だけど言う事はできず
ただアイツのそんな顔を見ながら
私は努力した
アイツと共に居たいと思っている
それでも怖いのだ
拒絶も今の関係が壊れるのも
心地よい居場所に居られなくなるリスクを恐れて前に進めない
愛して欲しくて
愛をささやいて欲しくて
愛を捧げたいのに
ただただ恐ろしいのだ
アイツからの拒絶という可能性が
「どうしたの多由也ちゃん？顔色悪いわよ？」
ああ恐ろしい事を思ったからだろう
「大丈夫ですよ、それより食事の支度をしませんか？」
もう日が暮れ始めた
大袈裟なリアクションを取ってヨシノさんは準備を始めた

アイツの嫁になってくれないか？か…願ったり叶ったりな事なんだがな
それはアイツに告げる事が出来たら考えよう
それまではこの気持ちは閉まっておこう
それが私の出した答えだった。

姦しいのに3人4人も変わらない

私はそれなりに焦っていた
何故なら服といえばお洒落より実用性
動きやすくそれでいて好みな服を着る
その程度で良いと思っていたが…
ヒナタ、テンテンから始まりサクラとイノも参加し
いわゆる着せ替え人形になる日が私にも来たのだった
サクラはゆるふわ系
イノはセクシー系
ヒナタは綺麗系
テンテンはスポーティな服を勧めてきた
正直テンテンの勧めてきた服が妥当だと判断した私は早々に決定をしようとしたが
『いつもとあまり変わらない』と無慈悲な言葉でテンテン以外の服を選ぶように言われてしまった
イノの服は却下しサクラの勧めた服は悪くは無いが動きづらい

ヒナタの勧めてきた服は私には可愛すぎる気がして気恥ずかしい
誕生日が近いからと好意で進めてくれているのだろうが
些か疲れてしまった
女が３人揃えば姦しいと言うが
女は何人いても煩いのだと私も女ながらに思った
ーーー誕生日を祝われるようになったのは木の葉に来てからだ
少なくとも大蛇丸の所にいた時は絶対に無かったし
本当の家族の記憶殆どない
私は忍として音の里で育てられた実験体で…
それ以上でも
それ以下でもなかった
音の４人衆などと呼ばれたが
いま思えばただの捨て駒の一部でしかなかったのだろう
そんな私が友人に囲まれて
温かな気持ちになって
赦されるのか
あいつらの事は嫌いでは無かった

だが好きでも無かった
無関心と言うわけでもなく
ただ互いに似たような境遇で大蛇丸の下にいた
そこから抜け出した
いや、助けられたのは私だけ
シカマルとたまにあの森に行く
懺悔のような、祈りのような
そんな何かを捧げてる
ーーーーーーーーーー
…気づけば何故が綺麗目なセクシー系の服を着せられた
動きやすいようになっている上にセクシー要素も少ない
可愛い感じも少しだけ
……いや、何故？
いつの間に？
私がいつ着替えた？
『まぁ私にかかればこんなもんよ!!』イノは得意げに
『動かなかったし、つい…』テンテンは申し訳なさそうに

『凄く似合うよ!』と嬉しそうにヒナタは言う
『意外と大きいのよね…』と何処を見ているんだと言いたい
なんでみんなの要望が揃ってるんだよ
良くこんな服あったな
悪くないと思う自分がいるのもやや恥ずかしい
何故か皆んなが会計を済ませて何処かに移動する
慰霊碑の前だった
そこにはシカマルとヨシノさんが居て花束を持っていた
ヨシノさんはカーネーション
シカマルはスミレだった
それぞれ毎年違う花を供えているのは知っていた
だがシカマルはもう1束の花を持っていた
『おーやっと来たか』
私が、私達が来ることを知っていた口調で笑っていた
『随分と可愛い服装だな』と笑っていた
ヨシノさんも愛らしい!!と抱きついて来た
皆んな苦笑いをしていたがシカマルは嬉しそうだった

笑顔の中に優しさと少しの切なさが混じったような
そんな笑顔だった
「お前さ最近なんでそんな顔してるんだ?」と聞いてみた
シカマルは静かに微笑んで「さあな」と言った
とても優しげで暖かい顔だった
「さあなってなんだよ」と私は言おうとしたら
『へ?どんな顔してるの?』と4人が聞いて来た
思ったままの言葉を言ったら
ヒナタは顔を真っ赤にして
サクラは唖然とした顔で
イノはやれやれと言う顔で
テンテンは面白い玩具を見つけたような顔をしていた
…え?何?
シカマルは笑いながら花を渡し帰っていった
意図も意味もわからず受け取り後ろ姿を見送った
受け取った花は白く、イノいわくアネモネと言うらしい
意味は教えてもらえなかったが…

アイツからのプレゼントと思うと頬が緩む
服よりも嬉しく思ってしまうのは４人失礼だったが
それだけ嬉しかった
初めてもらった時とは違う喜びを感じた
これが恋なのだろうと思ってしまう
今日はとても良い日だ
友達に恵まれた、家族の温もりを実感した
家族の抱える痛みを共有した
ただアイツの心はまだ判らない
それだけがもどかしかった